
コンの冒険

水風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンの冒険

【ZPDF】

Z0154Z

【作者名】

水風

【あらすじ】

藍善との戦いで死神の力を失った一護、コンは一護と暮らす理由がなくなり何もつげずに出ていってしまった。

そう、ルキアと暮らすために

しかし、コンに待っていたのは、綿も飛び出すアクシデントの連続だった。

久しぶりの浦原商店

俺は、死神代行黒崎一護、今は死神の力も、靈力のかけらも残っていない、

最後に死神化したのはルキアと虚たいじをしたときで、そんでもつてあの時の月牙天衝はかなり靈力を消費しちまつて次の日の朝、俺は、死神の力も、靈力も失った。

「（ここ、どこだ？）」

一護は知らない場所にいる、

「（なんだ？声が聞こえる）

しばらくすると、はつきり聞こえた

「お前が…にな…のだ」

「ルキア！！！」

一護は目覚めた

「んだよ、夢かよ」

「このところ、毎日のように同じ夢を見る。ルキアの声だというところまでは分かるが聞き取りにくい

黒崎一護 15歳

髪の色 オレンジ
瞳の色 ブラウン

職業 高校生 死神代行

でも、死神の力はもう、ない。

特技 なし

もう、幽霊は見えない。

一護にとつては憧れでもあつたが、時々死神の力がもしあつたら、と思う時もあるが、覚悟してやつたことだから、後悔はない。

コンは2日前から行方不明で、今日は土曜日、学校は休みだ

「お兄ちゃん！」「飯ですよー！」

「ああ！今いく！」

今日あたりは少し歩くか。

そう思いながら階段を下つていぐと一護は警戒したが、その必要は無かつた。

「おーいゆず！親父は？」

「お父さんなら仕事で出張してるよ！」

「あ、一兄、ちょっと話があるんだけど。」

夏梨の話の内容は今までだと靈的な話なのだが、俺が靈力を失つてからは、その話も無くなつた。

「今日、浦原商店にこれ渡して欲しいんだけど、中身はみないでね。」

最近、夏梨は、浦原商店にやけに手紙が多い、けど、いつもは自分で渡しているのだが、

「いいぜ！」

ちゅうびじゅうびに行きたい気分だつたからちゅうびよかつた。

「さてと、そろそろ開店の時間ですねエ、テッサイ、じん太、雨じやあ準備お願ひしますね。」

妙に怪しい格好の男、そう浦原喜助が店長の駄菓子屋、「浦原商店」表向きには、ただの駄菓子屋、裏では靈的商品を売つてゐる。

「それにしても変わんねえな」

浦原商店に来るのは3ヶ月ぶり、わざわざ入り口としたらテッサイに放り出されてしまった。

「いやあ～久しぶりっスねえ～黒崎サン。」

やはり、衣装は変わらない。

「まだ3ヶ月しか経つてねーだろ」

少々呆れぎみの声で言つ

「そつスかね～、黒崎サンも相変わらずの染めつぶりでえ～。」

「だからこれは地毛だつて。」

「ところで何かようスかあ？」

このやり取りで目的を忘れていた

「これを渡してくれつて、夏梨が。」「結構早いお返事でえ～」

どんな内容なのか分からず聞いていたが

「内容は教えないってスよ?」

浦原に先を越されてしまった。

「じゃあな、浦原さん」

「あ、コンちゃんはどうしましたか?」「あこつないおととこ出てつ

たぜ」

「じゃあ、探してくださー」

一護が田を細める

「何でだよ」

「そりやあもちろん、コンちゃんはモッド ソウル、ちゃんと管理しないと廃棄されちゃいますから」

その後沈黙がながれ

「どうしましたあ?」

「浦原さん、もしソウル ソサエティ何かにわたつたら廃棄されちゃうのか!?」

「い」答

その言葉を聞いた一護は浦原商店を飛び出し、コンを探し始めた。

「黒崎サン、ちやんと探してくださーいねえー、わひと石田サンにでも連絡しましょーかね」

久しづつの浦原商店（後書き）

どうも、初めまして水風です

これが、僕の初投稿となります、いかがでしょうか？これからオ
リキヤラ作ろうかとも思いましたが、なんか合わなそうで
止めといったほうがいいですかね？

ちなみに、この小説終わったら次の小説はこれの続きみたいなのを作
ろうと思います。ちなみにこの小説にバトルはありますのでちや
んと

なんで追いかけてくんのー！？

時は少し戻り、コンの様子を見てみよう

一
私は
……
だ

家族を……たしか？」

お前たゞまにこの力

「阿す おはよう」

一隻はすがすがし

黒崎一心のモード・シグナルを受け流した。

「ぐふーさすがだな……一護……もうお前に教える事は……何も……ない！」

そして頭から血を流した一心が一護の布団で血をふく

「な、なにすんだテメー！」

出血死の可能性か?・

ねえよ!「

そして、その後一心は窓から放り出されてしまつ。そんな一心を気にせずコンを起しそうとすると、コンはいなく、書き置きをして出ていっていた。そのころコンは

「姉さんに会うにはせんかいもんとやらをどうらなくちゃなんねーからなあーしきうがねえ、腹黒店長のとこにでも行つてみつか！」

コンが言つ腹黒店長とは元12番隊隊長並びに、初代技術開発局局長、浦原喜助の事である。

ちなみに今コンはライオンのぬいぐるみではなく、一護達にばれな
いようにクマのぬいぐるみに入つている。すると、そこに女三人組
がやってきた。実はコンはあの三人組を忘れていたのだ。

「（あ…あれば…一護のクラスの…え…と…女子…）」

基本的に乳の小さい人の名前は覚えられない為に、その三人組の名

ちなみに「国枝鈴」「小川みちる」「本匠千鶴」の三人である

「あたしね、じつはみちるも結構好みなんだー」

「イヤだよ…ていうか誘い方がストレートすぎるよ…」

「（一人で通学したかったのに…）」

そんな事を話していたら一つのクマのぬいぐるみに気づいた。

「う、コンだ。

「（ふふ…どうだ、このかわいい顔！我ながら絶品だ！）りや女子ならずとも拾わずにはいられない！まあ拾え！拾うのだ！！）」

そんな事をコンは思っていたがうまくいかなかつた

「あつかわいいぬいぐ…」

「キッタねーぬいぐるみー」

「おふつ！…！」

余りに突然かつ理不尽な攻撃だったためについ声が出てしまい、コンは三人組を見てみたすると

「（めつちや見てるー！！！）」

あまりの田つきに汗を流す「コン

「！」のぬいぐるみ…今…しゃべったよね…？」

「…喋るぬいぐるみ…捕まえてテレビに売れば…」

危険を察知したコンは思わず逃げだすがそう簡単にはいかなかつた。

「私から走つて逃げようなんていい度胸…陸上部一年生エース国枝鈴…100mは12秒フラット…！」

それに気がついたコンは全速力で逃げて、浦原商店を田ざすが運悪くかわいいものに田がないチャドに会い、チャドにも追いかけられる

「なんで追いかけてくんだよー！！！！！」

そうして何とか逃げきつたコンは浦原商店に着くものの、開店まで体力がもたず気を失つてしまつた。

なんで追いかけてくるのー！？（後書き）

とつあえず書きました。バトルはまだまだ出ません。ちなみに一護は戦いません。なぜなら、死神の力ないからwでもその内gonの冒険以外の小説ではありますけど（完全術とかも出したりして）

悪夢の浦原商店

「（俺、死んでねえ、チャドに追いかけられたのは　二回目か
？）」

今コンの言っている事はチャドに追いかかけられた回数である。

一回目は、春先に先ほどと同じ展開になり、国枝鈴とチャドに追いかけられた時、「二回目は、『BLEACHヒートザソウル』のチャドのストーリーモードを見た事がある人は分かると思うが、コンが井上織姫に会いに行こうとしたら偶然帰宅準備をしているチャドに見つかり、追いかけられ、色々な人物（井上織姫、石田雨竜、朽木ルキア、黒崎一護）に助けを求め、虚に取り付かれているなどの嘘を言つたが、全員チャドに倒され1日中追いかけられ、最終的に黒崎ゆずに捕まり、二回目の地獄を味わった時で、三回目は、先ほどの事である。

コン自身、もう死んでいると言つてもいい状況でもあつたので、生きている事は結構驚いている。まあ、生きていて良かったのだが。「（あつたけえ、あんなにへとへとでキツかったのに、平気だ、感覚すらなかったのに、なんでだ？そういうや俺、腹黒店長の店の前で倒れたんだっけ？……………ん？……………まで……………！）

てゆう事は、めちゃめちゃ嫌な予感がする……前は確かに覚めたらいきなり肘打ち食らって義魂丸吹き出したんだっけ？なにされるかわからんねーな。とりあえず目を開けてみるか。）」
そして、目を開けてみると。

「ぎこいやあああ……………近い！近い！近い！」

「おっ！素早い反応！いいですなっ！」

「何の話だよ！？寝起きの反応ビデオとかに撮つてどつかのテレビ局の番組に投稿でもすんのか！？とりあえずどけってんだ！」
コンはテツサイから脱出すると浦原にぶつかってしまう。

「ダメじゃないっスかコン酸。」

「コン酸ってなんだよ！？ 理科の実験の薬品名か俺は！？」

その時だった、コンの腹部から綿が飛び出し、血の呑み口に吹き出しがだ。

「なんじゅうじゅあ…………！」

「あーららー、石田サンでも呼びますかねエ？ テッサイ！」

「承知」

「ちょっとまて…………！」

「じゃあこう言えばいいんスか？」

あたしは魂にかけて石田サンを呼ぶ！

「いくらなんでもBLEACHで魂つて言葉使えばいってもんじやねーだろ！？ 絶対出来るわけねーだろ！？ てゆうか、今日学校だろ！？ 迷惑じやねえのかよ！？」

コンは絶対に石田を呼ばれるわけにはいかない、なぜなら毎回毎回変なアレンジをするため、石田には頼りたくないのだ。

石田による被害者は

コン、恋次（死神代行業務日記を見れば分かる）カクライザーなど。

「あ、石田サン来たみといっスよ。」

「なんでー…………！」

そして、時間は戻り、一護が浦原商店を飛び出していった。

悪夢の浦原商店（後書き）

久しぶりの投稿です。

見てる人つているんですかねえ。

もう一つ連載中の小説

「もう一人の死神代行」

は見てている人いるんですけど、この小説はあんまり人気ないみたい
です。

とりあえず、

感想とかアドバイスとか待ってます。

コンとの再会

「どう行つたんだ? コンの野郎。
ん? 待てよ、そういうや、

確かめてみるか。」

一護は最もコンが行きそうな場所、そう、井上織姫の家だ。

「あれ!? コンじゃねえか! ?」

一護はまだ、ほんの少しだけ靈力があつたため、代行証の効果があり、それを使ってコンをぬいぐるみからとり、浦原商店に持つていき、コンを浦原に上げたのであつた。

「わりいな、コン浦原さんのとこでがんばれよ。」

「ちょっと待てよ! この作者! 」この小説のネタつかばなくなつたらつて、

適当な終わり方すんじゃねえ――――――

「ソルジャーの再会（後書き）

すみません！ 適当な終わり方で！

最後の最後までお気に入り登録されなかつたのが残念だつたなあ。
では、僕のもう一つの小説、もう一人の死神代行もよろしくお願ひ
します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0154z/>

コンの冒険

2011年12月17日22時49分発行